連載

観光まちづくり最前線 No.10 地域を歩くレポート

全国測量の、伊能忠敬翁の原点を観光まちづくりに活かす
～伊能忠敬翁の地域経営学を学ぶ視察研修ビジネス（千葉県香取市佐原）

帝京大学　経済学部　観光経営学科　大下ゼミ

伊能忠敬といえば「全国測量の人」というイメージが強いですが、それだけではないのです。今回は、古い町並みが有名であり忠敬翁ゆかりの地である千葉県佐原をレポートします。

■佐原の名主の地域経営学の極意から学ぶ

千葉県佐原は、江戸時代の中後期に、利根川の舟運によって富を得た物流都市が地域の成立ちで、江戸時代に5,000人以上の人口集積がありました。代官が治める地域で、江戸時代に既に名主による住民自治が行われていました。その立役者の一人が伊能忠敬さんです。地元の方々は「ちゅうけい翁」あるいは「ちゅうけいさん」と呼んでいます。

佐原では誰もが知っている有名なエピソードがあります。忠敬翁は、飢饉の際の米の相場の変動を意識し、大量に米を買い付けていました。実際の飢饉にあたり土木事業を興して米を配給、一人の餓死者も出さなかったのです。また、予想を裏切り値が下がってしまった時がありました。普通の人ならばここで最小限の損で売り払ってしまうことでしょう。しかしそれでも米を持ち続けていると、大洪水が起こり一気に値が上がりました。しかしそこでも売りませんでした。まず、その米を佐原の飢饉と打ちこわしの危機を脱するまで地域の為に使い、その後、江戸で売り格外の利益を得たのでした。まず地域の民（住人）を第一に考えること、目先の利益にとらわれず周りの環境と将来予測を意識すること。これこそが地域経営の極意ではないでしょうか。

■貴重な体験プログラムが盛り沢山！佐原の視察研修ツアー

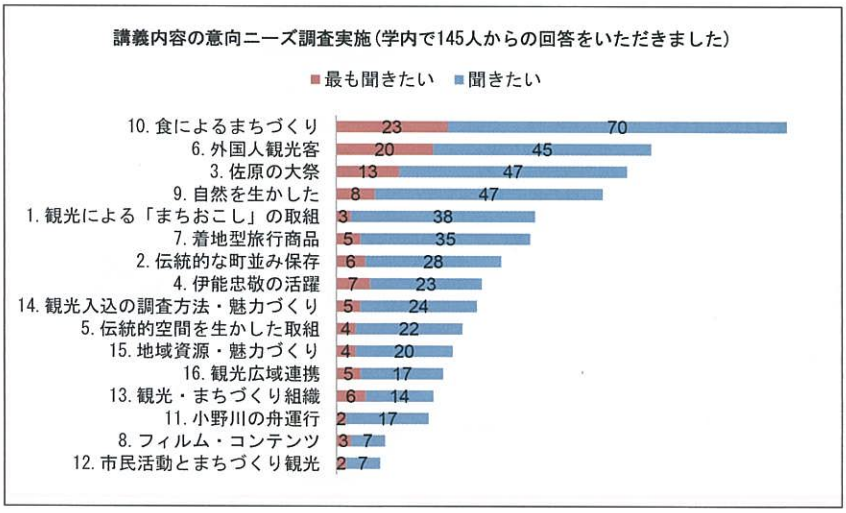
佐原での視察研修ツアーは若者ビジネス支援と連携し、最終的には着地型商品のプログラム化を目的に企画されました。私たちも学内でニーズ調査を実施・解析し、独自の講座プログラムを企画して実証することとしました。忠敬翁の知られざるエピソードや訪日外国人誘致政策等も講座メニューに加え、また座学だけでなく施設の見学をしながらの講義形式等、学生目線での工夫を凝らしました。地域で日頃活躍されている市民の方々にも講師をお願いしました。

佐原は商都であり、江戸を超える富があることから「江戸優り」と呼ばれています。そんな面影が残る昔ながらのまちを着物で歩く体験プログラム。着物でまち歩き自体はメインの観光資源にはならないと思っていましたが・・・・留学生は大喜び。着物で舟に乗っているだけでモデル気分「まるで自分たちが観光資源の一部になったみたい」～着物で歩くこと自体が新たな観光資源になっていたのでした。

佐原の大祭の歴史・運営のお話を市民講師から、山車会館の中でお聞きしました。眠くなることはなかったです。

■地域の先人達の志・精神が佐原の新しい観光資源に！

普段味わうことができない伝統的な町並みは歴史観が溢れており、そこにいるだけで非日常を感じることができます。この礎でもある佐原が輩出した偉人・伊能忠敬翁の業績とエピソードを物語化し、風景と融合させることによってより魅力的な商品にすることができると思いました。

「地方創生」の掛け声の下、全国津々浦々で地域の個性的な取組みが考えられています。先人の地域おこしに取組んだ志と精神を学ぶ佐原での視察研修ビジネスは、“地元愛”醸成の再確認と集客とを目指す一石二鳥の取り組み。伊能忠敬翁の手法は現在に継承されていると感じました。　（重松・逵・岩瀬＠事業推進グループ）

着物でまち歩きしていると、モデルになったような気分でした。